

スポーツの可能性

沼津市長 頼重秀一 × 日本フェンシング協会会長 太田雄貴



やりきることで見えたもの

【市長】 明けましておめでとうございます。五輪メダリストの太田さんとの対談ということで緊張しますが、この機会をとても楽しみにしていました。本日はよろしくお願います。

【太田】 こちらこそよろしくお願います。フェンシングというスポーツを通して様々なお話ができたかと思っています。

【市長】 いよいよ東京2020オリンピック・パラリンピックの開催まであと1年と迫ってきました。静岡県では東部地区が自転車競技の会場となり、自治体の枠を越えて盛り上げていこうという機運が高まっています。太田さんは招致活動でプレゼンターとして最前線で活躍されていましたが、招致が決まった瞬間はどんな心境だったんですか。

【太田】 あの瞬間プレッシャーから解放されたこと、目の前で子どもたちが世界レベルのパフォーマンスを感じてもらえるという喜び。そして多くの人への感謝などいろいろな感情が一気に込み上げてきました。

【市長】 涙しながらガッツポーズをする姿がとても印象的でした。私たちがらしたら想像もつかない苦労があったのでしょうか。

【太田】 1億人の期待を背負っていたので、並大抵の重圧ではありません。

スポーツには健康に生活できる、子どもたちの成長を支える、世代間の交流が生まれるなど様々な効果が期待されることから、本市ではスポーツを通じたまちづくりを重点施策のひとつに掲げています。

沼津には県内でも数少ない高校フェンシング部や小学生も所属するクラブがあり、かねてよりフェンシングの土壌があったことから、日本代表チームの強化合宿の招致や小学生を対象とした全国大会の開催などの取り組みを積極的に進めています。

東京2020オリンピック・パラリンピックを1年後に控えた今回の新春対談では、フェンシングと沼津の未来やスポーツの秘めたる可能性について、日本フェンシング界のキーパーソンである太田雄貴氏と頼重秀一市長が熱く語り合いました。

◎スポーツ交流推進室

☎055・934・4843

した。その意味では選手として闘ったオリンピックのほうが精神的には楽しかったかもしれません(笑)。でも今思えば、これだけ多くの皆さんの後押しがあるなかで挑戦できたのはとても貴重な時間でした。

【市長】 お話を聞いただけで、すごい経験だったことが伝わってきます。

【太田】 スポーツでも勉強でも、誰にでも経験があると思いますが、どんなにすばらしいビジョンがあっても、勝ち切れないといけないと思うんです。

【市長】 やりきれた理由はどんなところにあるんですか。

【太田】 僕たちプレゼンターだけでなく、スポットライトが当たらないところで汗を流していた人がたくさんいて、彼らも本当に頑張っていたんです。緻密な計画や準備が必要ですし、舞台裏での交渉も非常に重要なんです。それらを進めてきたメンバーの素晴らしい働きがあって、チームで同じ方向を向いていたからこそ勝てたわけです。いろんな人の努力があったことを知っていたので、最後のバトンを託された僕自身もやり遂げることができました。この経験は日本フェンシング協会会長という立場にも役立っています。

【市長】 チームの力ですごくですね。沼津のまちづくりにおいても、行政のみが進めるのではなく、市民と行政がひとつになって取り組んでいくことが大切なのだと強く感じました。